研究発表要旨

The Sacred and Profane Love Machine を読む
― アイリス・マードックの描く“メロドラマ”―

中　窪　　靖

The Sacred and Profane Love Machine（1974）（以下、*SPLM* と略記する）は、夫婦関係を中心に、登場人物たちが相互に交錯する関係の織りなすプロットで構成されている。

主人公のブレイズ・ガヴェンダーは、二人の女性おのおのと二つの家庭を作っている。彼の妻の一人、ハリエットは近くに住む作家モンティー・スモールに愛されていると錯覚し、彼に受け入れてもらおうとする。それは、夫ブレイズとの関係がうまくいかないことに起因している。ハリエットは、夫が別に家庭をもっていることを知るのである。しかし、モンティーは彼女を受け入れることはない。モンティー自身は亡き妻ソフィーへの思いを断ち切れないでいる。彼は、癌になった妻を救えなかったことを悔やみながら生きている。

ブレイズのもう一人の妻であるエミリーは、彼と最も価値観の合致する女性であるが、彼女との出会いは運命のいたずらとしか言いようがない。もしも彼が最初に彼女と出会っていたら、彼の人生は物語の描くものとは異なっていたかもしれないのである。

ハリエットとエミリーとは、住む世界が異なる。特に、労働者階級に属するエミリーは、ハリエットの住む中産階級への憧れと嫉妬の気持ちで悶々としている。エミリーは哲学者メルロ・ポンティに関心をもつインテリでもある。この点では、彼女は精神分析を生業としているブレイズと知的な領域で理解し合うことができる人物である。

また、ブレイズのもつ家庭には、それぞれに子供が一人いる。二人の子供たちは、どちらかといえば、物語の背後でそれぞれの役割を演じていると言えるかもしれない。特に、エミリーの息子のルーカは、物語を結末に導くための重要な役割を負っている。

このように物語のプロットをたどると、この作品は人間の世俗的な側面を強調して描かれていることがわかる。運面の人との出会い、妻の不慮の死、そしてとりわけ主人公の利己的とも思える夫婦関係の構築などである。それは、いわゆる「メロドラマ」的な構成の物語であると言えるのではないか。これはまさに、この作品のタイトルの、「Sacred and Profane すなわち、神聖でありかつ俗である」という部分と合致している。

さらに、主人公の世界に時に関わりつつ、時に傍観者として観察を続けるモンティーがいる。作家である彼は、架空の人物マグナス・ボウルズを創造し、ブレイズとハリエットの生活に関わりを持ち続ける。作家であるという点に注目すると、彼は作者アイリス・マードックの分身の役割も兼ね備えているという想像も可能である。

現代では映像の分野で「メロドラマ」という語がしばしば使用されている。もともとは、18世紀のフランスの音楽劇についての使用がこの語の発祥とされている。また、19世紀の作家オノレ・バルザックやヘンリー・ジェイムズ作品についても、「メロドラマ」的要素が指摘されている。

本発表では、以上の点を鑑みながら、Peter Brooks の著書 *The melodramatic imagination: Balzac, Henry James, melodrama, and the mode of excess* を手掛かりに、特に物語の中心に位置するブレイズとハリエットの夫婦関係を大きく反映している二人の手紙のやり取りに注目することで、「メロドラマ」的側面からマードックの *SPLM*（1974）を分析した。